

専修大学村上春樹研究会 第2回 発表要旨

◆村上春樹『1Q84』の〈母〉たち

平野葵

村上春樹『1Q84』を、〈母〉という視点から読み解く。

村上作品における〈母〉は、これまであまり論じられてこなかったテーマである。しかしこの『1Q84』には数多くの〈母〉が登場し、作品の根底と深く結びついている。そこでは、先行する『海辺のカフカ』において展開された、父と息子、そして母と息子の物語が反復されつつも、視点人物が母親になること、すなわち〈母〉の生成という、〈母〉自身の物語もまた同時に展開されている。また、青豆の他にも、母性を欠落させた〈母〉であるふかえりや、暴走する母性に引きずられた〈母〉である老婦人、あるいは消失する他の母親たちなど、存在あるいは不在という形で、様々な〈母〉が描かれている。

本発表ではこれらの〈母〉たちに着目し、父・夫・娘といった要素と絡めて分析することで、強大な物語としての「〈母〉の物語」という作品の構造を明らかにし、『1Q84』の位置づけと評価を試みる。

◆村上作品におけるコミュニティ

松枝誠

村上春樹『1Q84』には様々な共同体が描かれている。完全な共同生活を送る「タカシマ塾」から分派し農業コミュニオンから宗教団体へと転換した「さきがけ」、青豆がかつて所属していた「証人会」。また、柳屋敷の老婦人が管理するセーフハウス、あるいは劇中劇である「猫の町」まで、多様な規模の共同体が存在する。そして、これらの共同体に共通するのは、それらがそれぞれの登場人物をとりまく現状の生活を批判するために創設され、また存在するものであるといえる点であろう。

過去の村上作品を眺めても、『羊をめぐる冒険』から『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』、『ダンスダンスダンス』、『海辺のカフカ』といった作品でもこうした共同体の存在を指摘することができる。

本発表では過去の村上作品で描かれる共同体を検討しながら、『1Q84』で描かれる共同体を比較し再検討したい。

◆反転する『1Q84』——始まりとしての声

佐々木亜紀子

『空気さなぎ』はふかえりの声から始まった。その声をアザミが「タイプ」し、天吾が書き換えて小説『空気さなぎ』としたのだ。そしてそれは文芸誌の新人賞に選ばれて、ベストセラーになる。つまり「空気さなぎ」という女の声、男の言語システムに整合せられて小説『空気さなぎ』として流通したのである。だが、〈知〉の書きことばによって構築されるはずの小説が、「読(ディ)字(スレ)障害(クシア)」のふかえりを作者にしているという背反をどう考えればよいのだろうか。

このような展開は宗教の流布に酷似している。たとえば大本教の開祖出口ナオは文盲だったという。そのナオの神がかりした声がお筆先となり、その稚拙な文字の連なりは、出口王仁三郎によって整えられ、宗教というシステムにのせて広められた。

宗教の教義が世界を解釈し直すように、『空気さなぎ』は世界を反転させ、二つの月が浮かぶ Lunatic な世界を繰広げる。愛と憎、偽りと本物、犯罪者と被害者、そして読者と作中人物。それらは反転しシンクロする。「エッソの虎」が反転していたように。

文学の祖がオーラルな神話であったのと同じく、『1Q84』は声に始まる物語である。